

自立活動の授業づくり リーフレット2

はじめに

特別支援学級は、小学校及び中学校学習指導要領に基づく教育課程の編成・実施を基本としながら、個々の児童生徒の障害の状態や程度等を考慮の上、特に必要がある場合には、特別の教育課程を編成・実施することができます。

特別支援学級における教育課程編成においては、特別支援学校小学部・中学部学習指導要領第7章に示す自立活動を取り入れることと、児童生徒の障害の程度や学級の実態等を考慮し、実態に応じた特別の教育課程の編成を行うことの2つの点を踏まえることが必要とされています（国立特別支援教育総合研究所、B-360,77-103.2021）。

本リーフレットは、令和5年度に引き続き、令和6年度の府内7校の中学校自閉症・情緒障害特別支援学級における自立活動に焦点を当てた実践的な研究から、自立活動の授業実践の紹介と自立活動の授業づくりのポイントをまとめました。
以下の内容で構成しています。

リーフレット の内容

【自立活動の授業実践】

- 1 A中学校の事例：単元『自分に合った学び方』
- 2 B中学校の事例：単元『カーリングを通してコミュニケーションの力をつけよう』

【自立活動を進めるためのポイント】

- 1 実態把握を要とした授業づくり
- 2 特別支援学級の授業づくりにおける特別支援学校との連携

「自立活動」の指導は、個々の児童生徒の実態に応じて、適切な授業時数の確保や指導目標、指導内容を設定する必要があります。そこには難しさや悩みを感じることも少なくないでしょう。まずは、「自立活動」を難しく考えずに、同じように悩みながらも、児童生徒に合った授業づくりに挑戦した研究協力校の実践を、授業づくりの参考にしてください。

*令和6年度研究紀要も併せて御覧ください。



Information

特別支援学級の授業づくりに関する参考資料を紹介します。自立活動の基本的な考え方や、特別支援学級の教育課程、具体的な事例や考え方等が紹介されています。御活用ください。

【京都府総合教育センター発行の研究報告書等】

・令和5年度京都府総合教育センター特別支援教育部プロジェクト研究報告

「自立活動の授業づくりリーフレット Research(実態把握)が効果的な指導のポイント！」

令和6年3月



・自立活動 Q&A

京都府総合教育センター

令和7年3月発行



・特別支援学級担任のための 教育課程ハンドブック

京都府総合教育センター 平成31年3月改訂



・特別支援学校・特別支援学級(知的障害) 学習指導案作成ガイド

京都府総合教育センター 令和4年5月発行



【国立特別支援教育総合研究所発行のガイドブック等】

・インクルーシブ教育システムの推進を目指す

特別支援学級の教育課程編成・実施ガイドブック

ー知的障害および自閉症・情緒障害特別支援学級を中心にー

国立特別支援教育総合研究所 令和3年3月



・自閉症のある子どもの自立活動の指導について考えよう！

国立特別支援教育総合研究所 令和2年5月



自立活動の授業実践

実態把握を要として一人一人の実態に応じた自立活動の授業づくりに取り組みました。

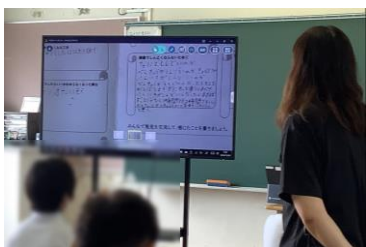
(1) A中学校の事例：単元『自分に合った学び方』

単元設定の理由

中学1年生5名を対象に、授業実践を行いました。

生徒一人一人の実態を把握する(※1)中で、中学校の教科学習において、学習方法の習得に難しさを感じている生徒が多いことがわかりました。生徒の多くが高校進学を目指していることから、本単元では、自分にとっての最適な学び方について考えることにしました(※2)。また、3年後の卒業を見据えながら、改善に取り組みました。

時間	学習内容
1時間目	中学校生活で楽しめていること、しんどいことについて
2時間目	1学期期末テストを終えて
3時間目	自分の得意教科と不得意教科について
4時間目	不得意教科をやっつける!友達にアドバイスしよう
5時間目	2学期期末テストを終えて
6・7時間目	来年度入学生にアドバイスする準備しておこう



大切にしたこと

□ ※1：生徒の実態や学習状況の把握

生徒の障害の状態や特性、発達 の程度等を個別の指導計画や個別の教育支援計画から情報収集し、流れ図と個別の指導計画を作成しました。

流れ図の書き方、指導目標や内容等の計画について、府立特別支援学校の地域支援コーディネーターに相談しました。



□ ※2：指導目標の設定

3年後の進路先で、自分に必要な支援を要請する力を培っていくには、他者に支援を依頼する力や、成功体験を積むこと等、いくつかのステップが必要です。本単元では、教科学習で一番困っていること(期末テスト)をきっかけにして、自分の学びを客観視し、得意、不得意について考える授業を実施しました。

□ 自分の思いを言語化する力を培うための指導の工夫

①選択肢を用意する(全時)

ワークシートと、ロイロノート・スクール※を用意し、どちらかを自己選択できるようにしました。書くことが苦手な生徒も、考えることに時間を当てることができ、自分の思いを整理して記述することができました。

※LoiLoが提供する授業支援ソフト

②思いを視覚化する(3時間目、4時間目)

自分の思いを視覚化して、他者と共有することで、新たな気付きを得られた生徒がいました。また、互いにアドバイスをしたり、友達の困り感に共感し合う姿も見られました。

③学びを振り返る(2時間目、5時間目)

時間を確保して行った期末テストの振り返りから、自分の得意、不得意に気付くことができた生徒がいました。また、1年間を通してワークシートの記述量が増えていき、内容もより具体的になり、より表現したいと取り組む意欲も感じられるようになりました。

今後は、一人一人の得意なことを生かし、次年度の入学生へのアドバイスをテーマにした授業を計画しています。

(2) B中学校の事例：単元『カーリングを通してコミュニケーションの力をつけよう』



単元設定の理由

学級の異なる中学1年生5名を対象に、授業実践を行いました。生徒の多くが、困っていることをすぐ言葉にしまい、後ろ向きな発言をしていました。そのことから、座学ではなく、楽しく身体を動かしながら、場に応じたコミュニケーションを学習することにしました。

本単元では、生徒の学習状況を踏まえ、毎時の目標を発展させながら取り組みました。

時間	学習内容
1時間目	同じ学年の仲間を知る
2時間目	自分たちで約束を決めて楽しく体を動かそう
3時間目	自分たちで工夫してカーリングをしよう
4時間目	体の動きを意識して工夫した投げ方をしてみよう
5時間目	コミュニケーションをとってカーリングを楽しもう



大切にしたこと

□ 段階を踏んだ指導

①話し合いの場を設定する(2時間目)

ゲームを行う際の約束について、生徒同士で話し合っ て決める場を設定しました。教師が適宜間に入り、仲介することで、生徒一人一人から、「後ろ向きな言葉を控える」、「前向きな言葉掛けを行う」等の意見が出るようになりました。

②双方向のやりとりを深める場を設定する(3時間目、4時間目)

仲間と共に話し合う、作戦会議を設定しました。より高い点数を取るために、ルールに対する工夫を考え、身体の動かし方やストーンの離し方を教え合う等、自分の考えをより具体的に伝える姿が見られるようになり、生徒間でのやりとりが増えました。

毎時の授業の中で、意識して指導したいことは多くありますが、一つに絞って指導したことで、生徒に伝えやすくなり、評価にもつながりやすいことに気付きました。あわせて、単元の数時間先も見通して、毎時の授業を計画・実施していくことが大切だと分かりました。(特別支援学級担任)

□ 進路を見据えた自立活動

毎時の目標を発展させたことで、生徒から「楽しかった!」「またやりたい」という前向きな言葉が聞かれるようになりました。また、5時間の単元のまとまりを設定したことで、生徒の変容も見ることもできました。

この機会を通して、3年後の進路を見据えた自立活動の指導の計画を考えることが大変重要であることが分かりました。(特別支援教育コーディネーター)

自立活動を進めるためのポイント

その他の研究協力校の実践から、自立活動の指導の更なる充実に向けた手掛かりをまとめました。

I

実態把握を要とした授業づくり

～研究協力校における、「実態把握」「教育環境の整備」の工夫から～

○ 実態把握

研究協力校では、特別支援学校の「実態把握シート」を活用し、生徒の優先課題を確認しました。自立活動の6区分から実態を把握することは、生徒のある側面だけでなく、多角的な視点で実態を捉えることができました。また、複数の教職員で話し合いながら生徒の実態把握に努め、その内容や状況を情報共有し、それを生かして個別の指導計画の作成を行いました。複数での情報共有の際は、特別支援教育コーディネーターが生徒に関わる教師を中心に会議を設定し、校内委員会等の組織を活用して開催しました。

自立活動の6区分に沿って実態を把握し、整理することで、個々の指導目標・内容の明確化と具体化につながりました。

○ 教育環境の整備

研究協力校では、生徒の学びの姿等を見取り、指導の方向性や改善に生かしました。また、障害を個人の問題ではなく、環境等との相互作用によって生じるものと捉える考え方（社会モデル）から、生徒が直面する学習上の困難を「環境」の視点から整備しました。

【学びやすい環境の工夫】

例えば、「コミュニケーション」や「人間関係の形成」に関する指導内容について、小集団での教育活動を通して行う方がより効果的な指導ができる場合、個々の指導目標を踏まえた上で、共通する指導目標の生徒でグループ編成し、指導形態の工夫を行いました。個々の生徒の実態把握から、落ち着いて学習できる座席や教材の配置、生徒が主体的に取り組めるように、見通しのある単元計画や1時間ごとの活動や場の調整を行いました。

また、生徒が達成感や成就感を味わうことができるように教材や学習活動を工夫しました。生徒の興味や関心、自信をもって活動や学習に取り組む教材等を取り入れることは、生徒の学習への意欲を高めました。

【教師の関わり】

研究協力校では、生徒の実態把握が進むと、教師の言葉のかけ方や指導のアプローチが変わりました。中学校では、小学校とは異なり、教科担任制です。担当者間で情報を共有し、効果的な自立活動の指導のため、教師間で指導の方向性や課題の確認を行いました。生徒自身の「なりたい姿や、そうありたい姿」を教師が見取り、何かしらの学びにくさをもつ生徒が、自分に合った学び方を知り、自ら学習環境の調整をすることや、進路を見据えた自己理解を深めるためには、教師間連携が必要です。

〈校内教職員の連携・協働〉

自立活動の指導は、時間における指導だけではなく、各教科等の指導においても自立活動の指導と密接な関連を図って行う指導であるため、組織的な指導・支援の体制が必要です。

自立活動の指導で身に付けた力を、各教科等の学びの中で発揮できるよう、校内全体で特別な教育的ニーズのある児童生徒の情報共有と「特別な教育課程」について理解を深めることが大切です。

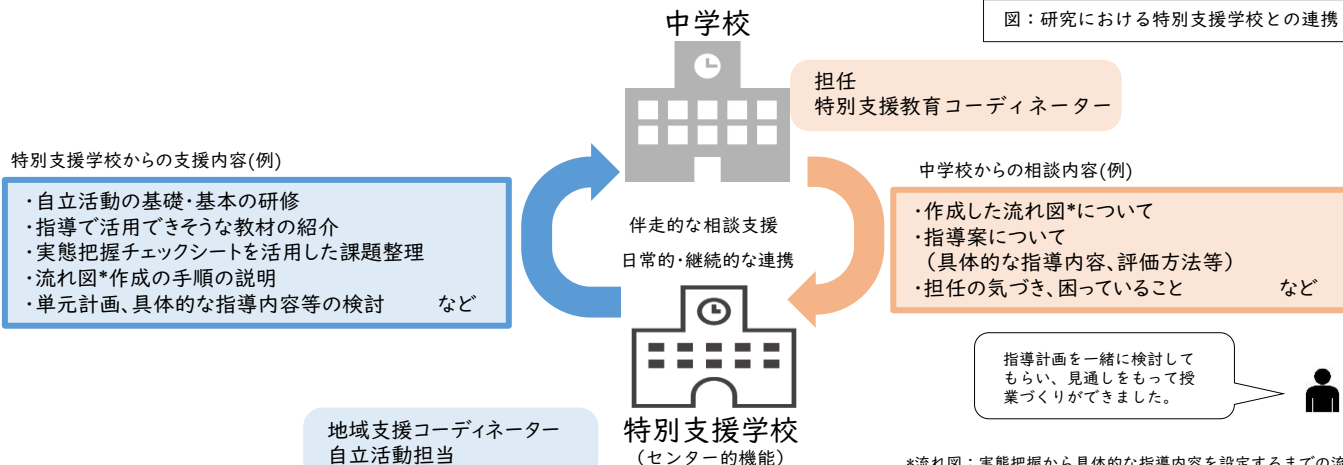
2

特別支援学級の授業づくりにおける特別支援学校との連携

研究協力校では、特別支援学級の自立活動の指導の充実を目指した、特別支援学校との連携の実践がありました。各研究協力校の実情に応じた特別支援学校の伴走的な支援により（図参照）、研究協力校の先生方にとって、「自立活動の指導は手探りで行っていたが、一緒に考えてもらい心強かった」と、児童生徒一人一人に対する指導・支援の充実を図る機会となりました。

指導・支援の充実を図るためには、校内教職員の連携が重要です。さらに、特別支援学校での障害のある幼児・児童・生徒への指導・支援内容や自立活動の指導に関する知見は、特別支援学級の授業づくりにおいて参考になります。

図：研究における特別支援学校との連携



*流れ図：実態把握から具体的な指導内容を設定するまでの流れの例
(特別支援学校学習指導要領 自立活動編)

おわりに

「自立活動」は、昭和46年、障害を改善・克服するための新しい指導領域として盲学校、聾学校、養護学校学習指導要領に「養護・訓練」として新設され、平成11年改訂では、「自立活動」への名称の変更や目標及び内容が見直されました。この変更では、個々の児童生徒が自立を目指し、「障害に基づく種々の困難」を主体的に改善・克服しようとする取組を促す教育活動であることが一層明確になりました。また、平成21年改訂では、「障害による学習上又は生活上の困難」と目標が改められ、平成29年改訂では、自立活動の内容は1項目増の6区分27項目となり、平成29年、30年改訂の小・中・高等学校学習指導要領総則部分に自立活動が明記され、障害のある児童生徒の多様な障害の種類や状態等に応じた指導を一層充実する視点が示されました。

特別支援学級には、自立活動の6区分である「健康の保持」「心理的な安定」「人間関係の形成」「環境の把握」「身体の動き」及び「コミュニケーション」といった、学習や生活する上で要素となるところに、何かしら困っている子どもたちが在籍しています。だからこそ、「自立活動」は欠かせない指導と言われるのです。

研究協力校においては、実態把握（Research）に重点を置いた指導の効果が明らかになりました。複数の教職員で、目に見えていない子どもの背景を客観的に把握し、情報を共有する大切さに気付きました。子どもの実態が分かることで、教材の工夫や授業環境の整備、そして何より、個々の指導の目標と内容がはっきりとします。個別の教育支援計画や指導計画の活用、特別支援学級の担任と通常の学級の担任の連携、自立活動の指導と各教科の指導を関連付けた指導を行うには、管理職をはじめ全教職員の特別の教育課程についての理解も欠かせません。

自立活動の指導の充実に向けては、特別支援学級の担任が一人で悩まず、今ある校内委員会等の組織や、特別支援学校の自立活動の知見や地域支援センターの伴走的な相談・研修支援のシステム等の校内外的のリソースを活用することも効果的です。子どもをみる視点を増やすことは実態把握の幅を広げます。子どもの実態が分かると、授業づくりはより楽しくなります。

最後に、2年間のプロジェクト研究に御参加いただいた研究協力校の先生方と、本研究の取組に当たりお力添えをいただいた全ての関係機関のみなさまに感謝いたします。

そして、本研究に御指導・御助言をいただきました、関西国際大学 教授 中尾 繁樹 先生に、深く感謝申し上げます。



令和6年度プロジェクト研究協力員

関西国際大学

教授

中尾 繁樹

長岡京市立長岡第四中学校
八幡市立男山中学校
久御山町立久御山中学校
木津川市立木津第二中学校
南丹市立園部中学校
舞鶴市立青葉中学校
京丹後市立丹後中学校

教諭
教諭
教諭
教諭
教諭
教諭
講師

今西 俊人
石田 直美
橋本 和恵
石川 千歩
鳥居 亮太
水上 奈美
提中 江利子

教諭
教諭
主幹教諭
教諭
教諭
教諭
教諭

多田 仁
川崎 三紀
小川 裕也
佐古 顕
俣野 千秋
大久保 章子
田中 千雅子

京都府立向日が丘支援学校
京都府立八幡支援学校
京都府立南山城支援学校

京都府立丹波支援学校
京都府立舞鶴支援学校
京都府立与謝の海支援学校

京都府教育庁指導部特別支援教育課

指導主事
指導主事
部長
主任研究主事兼指導主事
研究員
教師力向上アドバイザー

中井 理津子
池嶋 俊也
千種 朋子
長谷川 法子
辰巳 大雅
酒井 弘
下野 恵子
森本 尚之

京都府総合教育センター 特別支援教育部

地域教育支援部

研究主事兼指導主事